

## 〈書評〉

### 早稲田教育叢書 2

#### 大平浩哉編『国語教育史に学ぶ』

田 近 洵 一

早稲田大学教育総合研究室（現・研究所）では、公募によってさまざまなテーマの研究部会を設置しているが、本書は、これまでの国語教育に関する研究部会の研究成果を国語教育史研究にほり、大平浩哉編「早稲田教育叢書 2」としてまとめたものである。収載する全六編の論文は、最初の三編が話しことは教育史、次の二編が国語教材史、最後の二編が漢文教育史に関する研究となっている。以下、それぞれの論文の特質を検討することで本書の性格を明らかにしていくが、論述の都合上、まず国語教材史から取り上げることとする。

故・柳瀬喜代志氏の「教材・朱子の『少年老い易く学成り難し』詩の誕生」、および野村敏夫氏の「金田一京助『心の小径』をめぐって——戦後中学校教科書における扱いの変遷——」の二編の論文は、国語教育が時代の影響下にあり、その要請に応えざるをえなかった、というより自ら応えようとしてきた事実を教材史の上に明らかにしたものである。

まず、前者の柳瀬論文は、明治三四年以降、多くの漢文教科書が朱子の勸学教訓詩として掲載してきた「偶成」詩が、実は朱子

の詩文であることが確認されぬまま、朱子の名を付して権威化され、「近代日本が学校教育に課していた有為の人材を養成するという目標に沿って選択され」てきたものだという事実を明らかにしている。現在ではすでに教科書から姿を消した勸学詩ではあるが、しかし、この詩が「朱熹に偽托され」て教材化され、「勸学の箴言として使われてきた」という事実は、明治以降、時代に迎合してきたわが国の国語教育界の体質を示すものだったのである。

また、後者の野村論文は、金田一京助の「心の小径」の教材本文および学習の手引きを、各掲載教科書ごとに年次を追って丹念に検討したもので、すぐれた教材史研究となっている。この研究を通して野村氏は、「心の小径」という一つのエッセイが、時代の動向を背景に教材化（教科書教材として収載、あるいは部分削除）され、やがて姿を消していった歴史、さらに時代の要請に応じる形で教材としての価値づけがなされてきた歴史を、事実として明らかにしている。

本書は、その構成から見て前半三編の論文が取り上げている話しことは教育史研究に重点が置かれており、ひいき目と言わせてもらうなら、内容の上から見てもその点で研究史に残る仕事となるだろう。したがって、書評としてはまず最初の三編を取り上げるべきだったかも知れない。にもかかわらず先に教材史研究に関する二編の論文を取り上げたのは、本書の国語教育史研究の性格あるいは教育史に対する視点を明らかにしやすかったからである。すなわち、二編の論文とも、たんに国語教育に関する事象を取り出して解説を加えるのではなく、事象を時代状況の中に位置づけ、

それとの関係でその歴史的な意味を明らかにしているのである。

その点では、最後の石毛慎一氏の「大正期の漢文教育廃止論」も同様である。すなわち、漢文が国語教育の一分野としてどう位置づけられたかを、時代の教育観との関係でとらえようとしているのである。本書所収の論文では必ずしも明確ではないが、石毛氏は、漢文の扱いを通して時代の国語教育に対する考え方を明らかにしようとしており、漢文教育史研究における新しい視点の確立として注目されるところである。

さて、本書のメインテーマである話しことは教育史に関する三編の論文は、研究のあり方の上から見ても、実は本書の教育史研究の性格をもっとも強く持つものである。それは、話しことはが、国民の言語生活の向上、および近代日本の国家形成ときわめて密接な関係にあるものであり、そのことを明らかにしているからである。

とりわけ高野光男氏の「明治期話しことは教育の展開」は、明治維新後の日本の外的・内的状況のもとで、「国語の授業とはまさに国民としてのアイデンティティ確認」の場であり、それを可能にする「ひとつの言語」としての国家語「国語」の定着の動きに、話しことは教育が制度的に組み込まれていった過程を、帝國主義国家体制の確立との関わりを視野に入れつつ、概観的ではあるが、近代史的視野から通史的に描き出しているものである。高野氏には、教育史上の事象を年代順に並べて、それに解説を加えるという発想はまったくない。この高野論文は、教育的事象を時代状況との関係でとらえるとともに、さらに事象の上に時代を説

むといった歴史研究の一つのあり方を鮮明に示していると言える。

小原俊氏の「遠藤熊吉の国語教育理論に関する考察」は、「民意識の近代化を目指した言語の教育」というサブタイトルが示すように、一地方の教師としての遠藤熊吉の地道な標準語教育の実践を、「言語の改善を通じて、閉塞状況におかれた生活から村民を解放することを目的としたもの」であり、「日本人の内面的近代化を、国語教育の立場から積極的に促進しようとする努力であった」ととらえる。遠藤熊吉という一人の教師の教育実践の上に歴史を読もうとしているのである。

最後に、本書の編者大平浩哉氏の論文「国語教育史における音声言語指導」を読んでみよう。大平氏は、まず明治三四年以降の音声言語指導を「中学校教授要目」等の教育課程の上にとらえて、「国家の統一、標準語確立への模索と普及」が始まったのを「近代日本の国家形成の動きの一環」として位置づける。ついで昭和十六年の「国民学校令施行規則」を取り上げ、「醇正なる国語」の生活化にその特質があるとする。さらに西尾理論との関係をも明らかにするとともに、国民科国語における音声言語指導の歴史的な意味と問題点を指摘する。すなわち、大平氏は、明治以降の話しことは教育の進展を制度的な面に重点を置いてたどりつつ、明治期においては国家形成の動き、昭和期においては皇国民鍊成の要請といった時代状況との関係をふまえて、その先進性と問題点を明らかにしているのである。そしてその上で大平氏は、今日、そこから何を学ぶかについて積極的に論を展開していく。

上のような国語教育史の見方と受けとめ方という点で、言いかえると過去の遺産の継承とそこからの創造という点で、太平論文は、本書に関わった研究グループの教育史研究のあり方を示す典型的な論文となっている。

以上、本書の国語教育史研究の特質を検討してきたが、改めて見直してみると、本書が今後歴史研究を進める者にとって一つの指標となることはまちがいないとして、それにとどまらず、これからの国語教育のあり方や教材の見方などに関して多くの示唆を与えてくれるように思われる。その上でさらに話しことは教育史研究を例にして言うなら、本書は、過去の事象をつなぎつつ、ようやく史的展開のストーリーを描き出した段階ではないだろうか。ディテールの充実（資料探索）とその意味づけ、さらにはそのことによるストーリーの見直しなどが、今後の課題となるであろう。教育史研究の上では、本書を一里塚として、私たちも時代の中に教育をとらえ、教育の上に時代を読む本書の姿勢を継承していきたい。

(一九九七年五月一日 学文社 一七〇〇円)

(早稲田大学)

## 早稲田大学国語教育学会会則

(平成十年六月改正)

第一条 本会は、早稲田大学国語教育学会と称する。

第二条 本会の事務局は、早稲田大学教育学部内におく。

第三条 本会は国語教育に関する研究、会員相互の親睦、並びに後進の育成をはかることを目的とする。

第四条 本会は、前項の目的を達成するために、つぎの事業を行う。

一、大会・例会・研究会・講演会などの開催。

二、研究授業および授業参観。

三、機関誌の発行。

四、その他。

第五条 本会は、国語教育に関心を有する早稲田大学の教員（旧教員を含む）・校友・学生およびそれらの紹介による人々をもつて会員とする。

第六条 本会に、つぎの役員をおく。

代表委員（一名）

委員（若干名）

監事（二名）

第七條 本会に顧問をおくことができる。

第八條 役員は、総会において会員のなかから選出する。

第九條 役員の任期は二年とする。但し、重任を妨げない。

第十條 本会は、会務および事業を推進するために、事務局・編集委員会等をおく。

第十一條 会員は所定の会費を納めなければならない。但し、学生会員は半額とする。

第十二條 本会は、会費・寄付金・その他によつて運営する。

第十三條 本会は、年一回総会を開く。但し必要に応じ、臨時総会を開くことができる。

第十四條 本会の会計年度は、毎年四月一日からはじまり、翌年三月三十一日をもつて終わる。

第十五條 この会則は、総会の議決によつて変更することができる。